

# 第三百三十五回 青葉会

平成二十六年二月二十七日(木)

午後六時〜九時

丸紅来客食堂(談話室)

## 〈選者〉

☆ 川合万里子 先生

## 〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 久米五郎太 後藤保明(新人) 小西弘子  
 豊田ゆたか 中山芳博 福島正明 山崎亜也 山内天牛  
 伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄 渡邊盛雄  
 赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 中野一灯 橋口隆 早川允章 星田啓子  
 村田くに子 山崎青史 山本三恵

## 〈紙上選句〉

兼題「寒明け」含む当季雑詠五句。投句二句

ゴシックは撰者の天

## 《選者吟》

早咲きの梅の香幽(かすか)か床払ひ 万里子 (紀・保・芳・天)  
 白黒に枝々(えき)を描きゆく細雪(ささめゆき) 全 (恭)  
 同郷の雪国育ちソチへ発(たち) 全  
 決勝を真夜(まよ)の応援冴返る 全  
 自分へのチヨコレート選(え)る寒の明け 全

## 《互選句》

### 八点

☆ 晩婚の子の初(う)産や梅開く

堂哉 (紀・恭・忠・ゆ・敏・芳・隆・允)

### 七点

☆ 梅が香や大字(おおあざ)とつくこのあたり

恵洲 (万・猛・恭・忠・五・正・三)

指先で千切る蒟蒻寒の明け

正明 (堅・五・敏・灯・允・亜・天)

鮫鯨の尊厳もなく吊るさるる

昇 (猛・敏・允・正・亜・青・天)

(青:「尊厳もなく」が上手い)

### 六点

☆ 寒明けや母の握手に力あり

五郎太 (弘・ゆ・灯・隆・く・三)

### 五点

☆ 寒明けて八十路の一步踏み出せり

恭延 (万・紀・敏・ゆ・く)

(☆上五↓寒明くる)

振ると出るシャープペンシル木の芽時

正明 (孤・弘・隆・く・青)

(青:季語の「木の芽」がぴったり)

### 四点

☆ 雪かきに町内の顔そろひけり

そらお (万・猛・恭・灯)

☆ プロポーズして幾年や梅見頃

忠彦 (万・弘・敏・芳)

生きてあれば九ちやんも古稀星隴

恵洲 (忠・五・允・青)

寒明けや寄席に満ちたる笑い声

そらお (保・敏・く)

### 三点

☆ 多摩川や全て奥まで春霞

恭延 (万・猛・芳)

☆ 年の豆齢の数をと云はれても

忠彦 (万・五・允)

☆ たいたんは聖護大根お揚げさん

五郎太 (万・弘・隆)

(たいたん||京言葉で煮物)

寒明けやまづ京都への切符買ふ

弘子 (孤・保・正)

(孤:京都の冬の寒さは格別。春を迎え居ても立っても居られない京都への憧れ心が横溢)

一列に並んで歩く春の雪

保明 (忠・孤・青)

魔女ならぬ普通の少女残る雪

健介 (弘・龍・三)

受験生父懸命にラッセルす

芳博 (堅・灯・隆)

(灯:上五↓「大試験」がよろしいかと)

☆ 寒明ける古稀笑ひ合ふ同期会

全 (万・恭・博)

(☆上五↓寒明けや)

水を抜く池に人出や冴返る(井の頭公園)

亜也 (紀・ゆ・天)

後の世の色は何色梅真白

盛雄 (龍・ゆ・青)

(青:後の世は蜘蛛の巣の張った暗闇とドストエフスキーが言ってます)

二点

寄席はねて残雪避くる帰路遠し  
☆ 子供らと鬼から逃げる節分会

紀久男 (保・龍)

ストーブの布施へひととき京の寺 (建仁寺)

保明 (万・堅)

足跡へ轍 (わだち) へ今日消す春の雪

弘子 (紀・三)

スノーボードハーフパイプで銀・銅の受賞を祝う

全 (く・亜)

宙に舞う若鷺たちよ雪五輪

ゆたか (猛・く)

大腸の検診ことなく寒明けり

全 (紀・忠)

山越へ来 (く) 道祖神笑む春の雪

芳博 (恭・亜)

山菜萁の下照る道や廃寺跡

全 (灯・三)

風光るシヨパンのピアノコンチエルト

規雄 (孤・允)

☆ 朝刊も届かぬほどの雪の丈

天牛 (万・灯)

(灯: 下五 ↓ 「雪の嵩」か?)

寒明けて身体の凝りもほぐれけり

全 (保・隆)

今様に馴染めぬままに税申告

全 (保・正)

懐かしき単身赴任西行忌

盛雄 (忠・亜)

「天声人語」に清元の名曲「三千歳 (みちとせ)」の一節

一点

紀久男 (孤)

冴え返る天声人語の名調子

雪国の喪帰り転ぶ不覚かな

全 (天)

柿落 (こけらおとし) 若手はつらつ二月かな

全 (五)

寒明けの団地雪かき止 (や) め辛き

全 (芳)

烈風が寒林揺すり突き抜ける

全 (堅)

寒晴に白い世界が横たはり

全 (隆)

舞ひ降りる氷上の華涙あり

全 (青)

残雪は細み色増す庭の芝

全 (龍)

☆ 残雪に道譲り合ひ投票へ

忠彦 (万)

香を薫く部屋の一輪紅椿

五郎太 (猛)

京まもる白き比叡のたくましき

保明 (五)

六角堂氷雨避けたか鳩の群れ

全 (堅)

弱法師 (よろぼし) へ梅散る春の日本画展

弘子 (正)

日溜りの母丹精の梅の鉢

堂哉 (ゆ)

(☆上五「の」 ↓ 「や」)

パソコンのトラブル談議鱈の鍋

ゆたか (龍)

東京地方40年ぶりの大雪

はしやぎつかまくらに入り遊ぶ子ら

全 (堅)

沈下橋春の雪のせ鎮もりぬ (四万十川)

芳博 (亜)

挨拶の出来て人間野の莖 (すみれ)

正明 (天)

何やら訳のありさうな猫の恋

昇 (三)

優しさやシヨパンの息吹春の風

規雄 (芳)

春菊や油で炊きて緑照る

亜也 (龍)

腰かがめデージーの名札たしかめる

天牛 (正)

● 次回青葉会

三月二十七日 (木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

▲ 兼題「お水取り」「新入社員」「啓蟄」一句以上 含む当季雑詠五句まで。

投句二句

以上 文責 紀久男

一 今回は久しぶりの新人・後藤保明さん含め13名出席。投句7名。紙上選句11名。先生発案の兼題を随分久しぶりに復活(当会出句の語彙不足対策)。猛さんの進行役で御覧のように正明さん、恵洲さん、堂哉さんが高得点でした。

ソチ・オリンピックの日本勢の活躍ぶり(特に浅田真央のこと)や後藤さん自己紹介等話題にしつつ、寄贈の数々:先生からのおつまみ、弘子さんのGODIVAのチョコ、保明さんの「黒松・剣菱」(新撰組御用達の由)、芳博さんの「百年の孤独」(宮崎の大麦焼酎)、亜也さんの大吟醸「手取川」(宮城県)、忠彦さんの吟醸「瀬祭」(岩国)、小生の「越の寒梅・別撰」一升壘等を賞味。席上、正明さんの「夏草」第14集、龍平さんのエッセー「異邦人もしくは人の死に様」、恵洲さん・そらおさんらの三吟歌仙「初日の巻」、小生持参の「俳句あるふあ」2〜3月号を回覧。

二 関係者近詠

山路来て爺の手作り柿すだれ

万里子

寝たきりの友に短き年賀かな

規雄

椋鳥の 一列横隊鳩を追ひ

全

「NHK俳句」3月号 宇多喜代子選

熱爛や国民学校クラス会

全

水仙や鼻より暮るる天狗岩

孤舟

立ち話止めて湯冷めに気づきけり

全

「俳句四季」一月号に水仙についての句と解説を見開き二頁(カラー) 孤舟さん執筆

教会へ四世代寄りクリスマス

全

「俳句四季」一月号に水仙についての句と解説を見開き二頁(カラー) 孤舟さん執筆

産土神の古梅含めり小晦日

全

「爽樹」三月号

鉛筆の両端削り十二月

全

「大鉄会」二月

十枚づつ積む硬貨冷ゆ店閉ひ

全

一穢なき空へ梯子や松手入

孤舟

ひとこゑの優しさ出し得ず待降節

全

荒星の捲き散らされし高嶺空

全

憂憂と鶏短日を撃ちあへる

全

夕日差しさびしくなれば鴉浮かぶ

全

門衛のこちら窺ふ冬館

全

座布団をひとつ増やして鮫鱈鍋

全

熱爛のまづ徳利に触るるとき

全

シナトラのドーナツ盤や冬銀河

全

冬銀河シヤカと亡父の仁丹よ

全

田作りの付かず離れず人の世も

全

寄る睡魔使ひ分け聴く師走寄席

全

春の闊宇宙の底にある不穩

全

年の瀬や看護師走る夜の病棟

全

初揚羽時空の裂け目探しをり

全

退院し女房と二人年忘れ

全

煮凝りや言つてはならぬことがある

全

釣の師の喪中葉書や冬の雷

全

「夏草」第十四集

「萬緑」3月号

全

「大鉄会」二月

諍いを遠くに見つめ冬菜摘む

全

「爽樹」三月号

如月に消えた力士の夢数多

全

「大鉄会」二月

建国記念日

日の丸の無き記念日や鬼は外

全

「夏草」第十四集

師の少し辛き評聞けぬ余寒かな

全

「大鉄会」二月

きさらぎや永き集いの一里塚

全

「大鉄会」二月

余寒述ぶ「天声人語」名調子

全

「大鉄会」二月

「きさらぎ俳句会」二月

初鏡まだまだ鮮度落ちてない

全

「大鉄会」二月

残りまだトラック半周老いの春

全

「大鉄会」二月

ゆるゆると渡舟ゆくなり揚雲雀

全

「大鉄会」二月

寒紅の内儀きりりと割烹着

全

「大鉄会」二月

しづり雪の音を遠くに旅寝かな

全

「大鉄会」二月

寒の水飲んで臍腑を洗いけり

全

「大鉄会」二月

ぼんと音聴こゆるが如梅開く

全

「大鉄会」二月

こつこつとひとつこの道去年今年

全

「大鉄会」二月